

歴史探訪ツアー（白山古道）

日時：2015 年 10 月 11 日（日）

集合時間：13:30

集合場所：金沢文庫ふれあい広場

行程：

ふれあい広場（行程の説明） → 手子神社 → 白山東光禅寺
→ 地藏尊 → 白山社小祠群 → 白山道奥磨崖仏
→ 11 号やぐら → 六郎橋にて解散

資料目次：

- ①手子神社
- ②白山東光禅寺
- ③白山権現社
- ④磨崖仏

キーワード：

やぐら	鎌倉・室町時代
新田	江戸時代
暗渠	近年

①手子神社

手子神社

文明五年（一四七三）釜利谷の領主であった伊丹左京亮が、瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地に勧請したのを当社の創建と伝へる。

延宝七年（一六七九）伊丹氏の子孫である三河守昌家の子、江戸浅草寺の智楽院忠蓮僧正が、現在の地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として衆庶上下の崇敬を集め、明治六年村社に列格、社殿は大正十二年の震災で倒壊の後、同十五年に再建、昭和四十五年御屋根を総銅板葺に改修した。

現在は、宗教法人として神社本庁に所属する。

祭神 大山祇神（おほやまつみのかみ）

祭日 七月十七日 夏季例祭

十月十五日 秋季例祭（湯立神楽）

（なほ近年の例祭は前記に近い日曜に変更になる）（由緒書きより）

手子神社が今の場所に遷宮される前は、宮ヶ谷に約200年間鎮座していた。

境内社 竹生嶋弁財天社

古く「小泉夜雨」の起源となった小泉の瀟湘の松の下に祠であったが、享保八年（一七二二）に江戸の木島又右衛門政尚といふ人が玄峰和尚と共に、同所に石窟を構築し遷宮。以後、厄除、子授けの御利益があると信仰された。昭和十五年、時局により現在地に遷座した。（由緒書きより）

もともと竹生嶋弁財天社が鎮座していた場所は、現在、東急車輛や金沢高校・横浜市立大学の敷地となっている。竹生嶋弁財天社の遷座は、当地が海軍航空技術廠支廠の用地とされたことに伴うものである。竹生嶋弁財天社が鎮座している横穴は、もともとその場所にあった「やぐら」の転用である。昭和15年、竹生嶋弁財天社が現在の場所に遷座した後、昭和51年に、氏子や近隣の有志らの手助けで改修され、今の姿となった。

石段下のやぐら

手子神社を管理している瀬戸神社宮司らの話によると、石段下の五基と社殿裏の3基はいずれも釜利谷赤坂「やぐら」群に属する「やぐら」と推測できるとのことである。なお、石段下の5基については、先の戦争中には、御神宝を戦火から守るための防空壕として利用されたのであるが、社前を流れる宮川の護岸建設や道路工事に併せてなのか、現在ではコンクリートで塞がれ、しかも、「やぐら」の上部のみが地上に顔を覗かせるのみである。

②白山東光禪寺

白山東光禪寺（臨濟宗建長寺派）の寺伝によると、寺の創建は建仁年間（1201～1203年頃）であったとされる。創建当時は、金沢区釜利谷ではなく、後醍醐天皇の皇子である大塔宮護良親王を祭神とする鎌倉宮（1869年（明治2年）に明治天皇が創建）が現在鎮座している薬師ヶ谷（鎌倉市二階堂）にあった。その後、応仁年間（1467～1469年）に至り、東光寺は釜利谷郷白山道奥の旧地に移され、寺の呼称も「医王山東光寺」から「白山東光禪寺」へと改められたとある。

東光禪寺は、以前は、現在の場所からさらに谷奥に入った所にあった。東光禪寺現住職の話によると、関東広域に大きな被害をもたらした関東大震災（1923年）によって、東光寺は旧本堂などが倒壊した。それを機に、当時の住職らは、倒壊した寺の門などを現在地に移動させ、東光寺を再建したという。

釜利谷郷と古都鎌倉とは、かつての郡境である丘陵地を挟んで隣接しており、地理的にもそれほど遠くはない。また、鎌倉には良港がなく、逆に、釜利谷に程近い場所には、良港である六浦の港があったという理由もあり、釜利谷郷と鎌倉とを結ぶ古道である白山道は、鎌倉幕府が成立した初期においては要衝路であったようだ。釜利谷白山道付近には、中世の遺跡が数多く見出されている。

1241年になると、鎌倉と六浦とを結ぶ朝夷奈切通が、鎌倉幕府における第3代執権北条泰時公の命により開削された。この朝夷奈切通は鎌倉七口の一つである。さらに、1307年には、大山祇神を主神として祭る、源頼朝公ゆかりの瀬戸神社（金沢区瀬戸）の前の入り江に瀬戸橋が架けられるとともに、鎌倉から六浦や北条実時公ゆかりの金澤山称名寺へと至る主要路は、釜利谷の谷筋を経由する白山道ではなく、朝夷奈切通から現在の金沢区大道（だいどう）を経由する六浦道になった。その結果、白山古道は次第に寂れていった。因みに、東光寺が鎌倉の薬師ヶ谷から釜利谷郷の白山道奥旧地へと移された時期は、瀬戸橋が開通してからおよそ160年後のことであった。

白山道奥の旧地に建てられた東光寺は、大正期に至り関東大震災によって建物が倒壊し、現在地へと移転された。大震災による寺の移転から時が移った1960年代頃、白山道奥の古道沿いにはほとんど民家がなかった。また、谷奥の池からは美しい小川が谷筋を流れていたという。しかし、現在では、この辺り（白山道奥）には、多くの民家が立ち並び、谷奥の池はコンクリートの調整池となり、美しい小川は道の側溝のようになっている。

③白山権現社

山腹に鎮座する祠は、崖面に向かって右側から次の通りである。

- 一、白山稻荷大明神
- 一、地藏尊
- 一、白山権現社
- 一、諏訪社
- 一、不動尊

白山権現社には3つの扉が配置ある（三社合殿）。右側の扉の中には菅原道真公、中央の扉の中には白山様、左の扉の中には自然石が安置されているという。

石段の脇には、道真公に因んで、石段を登る右手側に紅梅、左手側には白梅が植えられている。

また風土記にいう「白山社〔除地〕是も白山にあり、其所の鎮守なり、小社巽に向う、前に鳥居を建て、石階あり、例祭九月九日、村内東光寺持」というのは、いまも残っており、旧東光寺址と小さな溝川をへだてた所にある。風土記に書いてあるように、石階十数級を上ると、森の中に、山の崖を切り開いた広い土地があり、崖の中央にくり抜かれた岩屋堂が白山様で、中のホコラの中心が白山様、右が天神様左が正体不明の石神様と、三社合殿になっている。この岩屋堂を中心として、左に一つ、右に二つの、さらに小さい岩屋があるが、中の堂舎は破壊されていまはない。（熊原論文）

風土記に記録されている石階下の鳥居は現在見当たらない。かつて白山社はま荒廃していたが、1970年以降、再興された。近隣の人によれば、1960年代には、白山社以外の祠がなかったという。

白山道の名称の由来ともなっている白山堂は、以前は、白山権現社よりもさらに谷奥にある白山磨崖仏付近にあったとされる。ところが、この堂は既に失われてしまっている。白山堂は、かつては称名寺の末寺であった。また、白山権現社の別当寺が白山堂であったという資料もある。白山堂の成立は、資料によると、室町時代までは遡ることができる。一方で、白山堂と東光寺が一体であった可能性を指摘する報告もあるが、実のところは明らかではない。

④磨崖仏

1936年9月、白山道奥の崖部に大きな磨崖仏が前金沢文庫長らによって発見された。見出された。熊原論文には、白山道奥の磨崖仏およびその付近の様子が次のように書かれている。

ここは、昭和十一年九月に、関前文庫長によって発見された、関東まれにみる大石仏（顔だけで一丈あまりあるが、いまはほとんど形相がわからぬほどかけ落ち、その上に草木が茂っている）のある大岩壁を背にして、東方に開けた二区割の畑地があり、中央部にはやや小高い段丘があつて、ここに塔あるいは鐘楼でもあったのではないかと思われるところがある。（熊原論文）

この大きな磨崖仏は今でも確認できるが、全体的にかなり欠け落ちている。石仏像が刻まれた崖の前の平地には住宅が立ち並んでおり、調整池手前にある車の転回場所には、金沢区役所による次のように記載された看板はあるものの、初来の人たちにとってこの磨崖仏は崖と見分けがつかない。

白山道奥磨崖仏

白山社は白山堂とも呼ばれ、南北朝～室町時代には称名寺の管理下におかれ、その末寺になっていました。

堂社の旧位置は不明ですが、北条氏が鎌倉と金沢の称名寺とを山越えに往復する古道が、このあたりを通っていたことは疑いありません。

この古道は「白山道」と呼ばれ、鎌倉時代後期に瀬戸橋ができる以前は、鎌倉と称名寺の往復に使われていました。

この山腹に刻まれている磨崖仏は、その旧跡を推定するための好資料であり、周囲が削平されていますが、現存顔面長4メートル、中世末期の彫刻です。

また、応仁年間（1468年）に鎌倉大塔宮からこの地に移った白山東光禅寺に関するものとすれば、御姿は薬師如来をかたどったのでしょうか。（案内板より）